

小児科医からのアドバイス 9

～腸チフス～

東京医科大学病院
渡航者医療センター
小児科医師 福島慎二

2012年6月になりましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。先月は、金環日食、スカイツリーの開業といった日本中に明るいニュースが多い月でした。

さて、トラベルクリニックでは、6～7月になると、夏休みに海外旅行に行く方、8～9月に海外赴任を予定しているご家族の受診が増えます。今回は、途上国に渡航する方が注意したい「腸チフス」という病気をご紹介しますと思います。

【腸チフスとは】

腸チフスは、サルモネラ菌の一種であるチフス菌 (*Salmonella typhi*) が、水や食品などを介してかかる感染症です。日本では「腸チフス」と呼ばれていますが、世界的には、「Typhoid Fever」、「Enteric Fever」の病名が一般的で、発熱をおこす病気の一つです。

チフス菌に感染すると、約7日～21日の潜伏期間の後、38～40℃の発熱が出現します。病名に「腸」という文字がついていますが、下痢、嘔吐といった症状は少なく、最初の症状は、主に発熱です。その後、腸からの出血、腸の穿孔、また意識障害などの合併症がおこることもあります。

抗菌薬という治療方法がありますが、最近は抗菌薬に対するチフス菌の耐性化も問題になってきています。

【どこで流行っているの?】

途上国では日常的な病気で、毎年約2,000万人の患者が発生し、約20～30万人が亡くなっていると推測されています。とくに、アジア、アフリカ、中南米諸国ではかなりの患者が発生しており、A型肝炎と腸チフスの流行地域が、ほぼ重なります。

最近日本で腸チフスと診断された患者は年間60～80人ほどですが、そのうち40～50人は海外で感染して帰国後に症状が出現した腸チフスです。どこで感染したかという点、主に南アジア（インド、ネパール、バングラデシュなど）で、つづいて東南アジア（インドネシア、フィリピン、ミャンマー）となっています。患者には小児も含まれています。

そのため、とくに南アジアに渡航される方は、成人でも小児でも予防したい感染症です。

【予防方法は?】

日頃から手洗いを心がけ、流行地では生水、氷、生の魚貝類、生野菜、カットフルーツなどを避けることが重要です。その他、予防方法の一つに腸チフスワクチンの接種があります。

【腸チフスワクチン】

世界的に、腸チフスワクチンには、飲むタイプの生ワクチンと注射タイプの不活化ワクチンの2種類があります。欧米諸国では流行地への渡航者を対象に使用されていますが、日本ではいずれも未認可なので、個人輸入している医療機関でのみ接種が行われています。

1) 弱毒生ワクチン

チフス菌の弱毒変異株(Ty21a 株)をカプセルに閉じ込めた飲むタイプのワクチンです。接種対象は、6歳以上の人になります。1カプセルを1日おきに3~4回飲みます。

2) 不活化ワクチン

チフス菌から病原性に関係する成分の Vi 多糖体をもとに製造された注射タイプのワクチンで、2歳以上の人接種対象となっています。0.5ml を1回接種します。

東京医科大学病院 渡航者医療センターでは、注射タイプの不活化ワクチンを海外から個人輸入し接種しています。インドなどに南アジアに渡航・滞在される方には、小児(2歳以上の小児)を含め、接種をお勧めしています。ぜひ、お気軽にお問い合わせください。

皆様は、金環日食を見られましたか？

僕はというと、金環日食を楽しみにし、わざわざ東京を離れ、前日から海辺に滞在していましたが、当日はあいにくの雨模様。結局部屋のテレビで、東京の金環日食を見ていました・・・。18年後の北海道では、「本物」の金環日食を楽しみたいと思います。

＝編集部より＝ 2011年1月より、新たに渡航医学に詳しい小児科の先生からご寄稿をいただいております。2010年9月より東京医科大学病院に開設された渡航者医療センターでご活躍中の福島慎二先生が隔月で登場です。子ども帯同の海外渡航者には心強い専門家です。読後の感想、意見、質問および今後取り上げて欲しい話題のリクエストなどを受け付けます。

ニュースレター連絡コーナー<http://www.jomf.or.jp/ning/index.html> からご連絡お願い申し上げます。

● 「小児科医からのアドバイス」索引コーナー

http://www.jomf.or.jp/jyouhou/jigyou_iryu2/jigyou_iryu2_4.html#v

● 著者の所属先サイト：東京医科大学病院渡航者医療センターはこちらから

<http://hospinfo.tokyo-med.ac.jp/shinryo/tokou/index.html>